

— 次の文章を読み、問いに答えなさい。

なお、問いは **問題用紙** No.3 にあります。

小学校は、大きな知的努力を必要とするところではなかった。私は本を読むことに慣れていたし、あらたに覚えなければならぬことは沢山あったけれども、理解するのに困難なことは、ひとつもなかった。しかし私は不器用な子供だったので、体操には **A** 閉口し、また画を巧みに描いたり、歌を上手に唱えたりすることはあきらめていた。粘土細工で私のこしらえた人の頭は全く人の頭にはみえなかった。「これは何だろうか？ 誰の頭かね、誰にも似ていないようだが……」と教師がいい、教室中の笑い出したこともある。「これは何だろうか？」と、教室中を笑わせることに満足した教師はもう一度いった。「ネアンデルタル人です」、窮した私は、出まかせをいった。「何だって？」「ネアンデルタル人」「何だ、そのネアンデル……とかいうのは？」「ピテカントロプス・エレクトウスより進化した人間の先祖だと思えます」「そうか」**①**教師は、そのとき不機嫌になって、呟いていた、「とにかく人間の頭をつくりなさい」——おそらく教師にとって **②** 私よりも教えるのに手間のかからぬ子供は少かつたらうが、私より生意気な子供も少かつたらう。

私にとつての教師は——小学校の教師はあらゆる課目をひとりで教えていたが、それぞれ得意とする課目をもっていたので、体操を好む教師や、図画、習字に重きをおく教師には親しむことができなかった。しかし受け持ちの教師が、理科に熱心な人だったときには、幸福だった。旧制中学校の生物学教員免状をもっていた松本先生は、魔術師のように、私たちのまえで、酸素を封じこんだガラス器のなかの細い鉄線を花火のように燃え上らせ、ナトリウムの小片を水中で魚のように走り廻らせ、蛙の体内からとり出した心臓を、リング液のなかで鼓動させてみせた。その実験に、私は全く魅了された。子供のどんな質問にも、根気よく説明してくれたので、私は他の子供たちが運動場へ散っていった後も、教室にのこつて、化学反応とか、分子の結合とか、浸透圧とかいう話を聞いたものだ。松本先生は私のために心臓の構造を図解しながら、「こういうことは君のお父さんの方が詳しいね……」といったこともある。色が白く、細い身体をした人で、いつももの静かな態度を崩さず、ゆつくりと話し、大きな声で生徒を叱るということが決してなかった。どこかに淋しい影があるようにみえたが、私はその人柄を好きだったし、その知識を尊敬していた。「よく事実を見なければいけない」というのがその口癖であった。私は原田三夫の通俗科学書で **③** 聞き **た知識**が、眼のまえの事実を説明するためには、たとえそれがどれほど簡単そうにみえる事実であっても、全く不十分だということを、理解するようになった。「そういうのは、正確でないね。正確に言えば、少しむずかしくなるけれど……」。事実説明が、私にとつてむずかしくすぎることは少なくなかった。しかし私は理解することに熱心だったし、松本先生はそれを知っていたのだろう。私たちはしばしば他に誰もいない教室で、**B** 黄昏の迫るまで話していることがあった。

私は、蛙の心臓の実験装置が教室の子供たちの好奇心を格別 **＊** 刺戟してはいるという事、おそらく同僚の教師たちもそういうことに特別の関心をもつてはいないらしいということを、知っていたし、またおそらくそのために松本先生の授業にはほとんどあきらめに近い淡々とした調子があるのかもしれないということも、感じていた。私が松本先生に感じた親しみのなかには、周囲の人々とはちがう興味のもち方を、いくらか共有しているという意識も含まれていたのかもしれない。私は、受け持ちの教師の、西洋人の語を借りていえば、**＊** プロテジエ (protégé) であつたし、そのことを充分に心得ていた。それは、子供の社会において、**C** 鼻もち成らぬことであつたらうし、私が心得ていなかったのは、その鼻もちならぬことである。

しかしあるとき、小さな事件がおこつた。その頃、小学校の門のまえには、文房具屋とならんで小さなパン屋があつた。弁当をもつて来なかつた子供は、

昼休みに、そのパン屋でパンを買って食べることを許されていたが、その他の時に、学校の門の外へ出ることは、かたく禁じられていた。ところが私たちは、教師の眼を盗んで、素早く門の外へ駆け出し、パンを買って駆け戻れば多分見つからずにすむだろうということを考えた。その考えには生徒を手荒く叱らない受け持ちの教師に、つけ込もうという思惑も混つていたにちがいない。事件を発見し、その思惑を見抜いていた **④** 松本先生の態度は、例になく、厳しかった。「門の外へ出た者は名乗り出る」ということになり、名乗り出たのは、学級の男の生徒の大部分であつた。そのひとりびとりに、「誰がいい出したのか」とか、「なぜついて行ったのか」とか、という尋問がはじめられた。平然と構えていた生徒もいないわけではなかったが、大部分の子供は青くなつた。私の膝は慄えた。言い逃れの道は、全くなさそうに思われ、罰の性質がどういふものかは、見当がつかなくなつた。「誰がいい出したのか」。誰がいい出したのかわからない、大勢が駆け出したので後からついて行ったのだ、と私は答えた。「規則は知っていたらう？」「知っていました」「大勢が駆け出したなら、なぜ止めようとしなかったのだ？」「……」「止めようとしても、止められなかったのか」「……」「止めようとして、門の外まで追つていったのか」というところまで尋問が来たときに、突然、私はその尋問が、見かけの厳しさにも拘らず、実は **⑤** 私を救うための誘導にすぎないということをし、はつきりと理解した。「はい、そうです」といえば、ただちに解放される。しかしそれは事実と反する。しかし「いいえ、止める気はありませんでした」といえば、私はどんな罰をうけるかわからない。そればかりではなく、誘導尋問を誘導として理解しない私自身の愚かさを認めるか、理解してもさしのばされた手を拒絶する頑固さを認めることになるだろう。私は自分が愚かであるということも、頑固に反抗的であるということも、承認したくなかつた。私は混乱し、迷い、「瞬の後」**⑥** はい、そうです」と小さな声でいつていた。

「おまえはよろしい、もう行ってよい」という声を、そのとき私はほとんど聞いてはいなかつた。解放されて歩み去るときに、私が背後に感じたのは、一列にならんだ同罪の生徒たちの視線だけであつた。その見えない視線は、私の嘘を非難していたのではなく、**⑦** 裏切りを軽蔑していた。同時に、私は自分自身を軽蔑し、激しく自分自身を憎んでいた。そのときの教師は、権力そのものであり、一列の生徒たちは、罰を受ける理由が何であろうと、また私とのつき合いが浅かろうと深かろうと、権力に対して無力な仲間がちがひなかつた。その後、私は何度も、たとえば、一九六〇年に、本郷通りで「安保反対」の看板を掲げながら、大学の正門を出てくる学生たちの一隊に出会つたときに、小学校の門からパンを買ったために駆け出した子供たちと、彼らを止めようとしていたと主張することで、教師と馴れ合った私自身に対する憎悪を、想い出したのである。

(加藤周一『羊の歌』岩波書店)

【注】

* 刺戟……「刺激」と同じ意味。

* プロテジエ……フランス語で、「保護されている人」、「お気に入り」。

* 安保反対……日米安全保障条約の改定に対する反対。

問一 線部A、Cの二つでの意味として最もふさわしいものを、次の各A、Eから一つずつ選び、記号で答えなさい。

A 「閉口し」

ア 自信を失い

イ おとなしく参加し

ウ ひどく困り

エ かたくなに抵抗し

B 「黄昏」

ア 夕暮れ

イ 夕焼け

ウ 夕立

エ 夕日

C 「鼻もち成らぬ」

ア いやみでがまんできない

イ 気取っていて親しみにくい

ウ いつまでも続かない

エ おそれるほどではない

問二 線部①「教師は、そのとき不機げんになって」とありますが、なぜ「不機げんになつた」のか、教師の気持ちの変化がわかるように説明しなさい。

問三 線部②「私よりも教えるのに手間のかからぬ子供は少かつたらう」とありますが、このことから「私」がどのような「子供」だったことがわかるか、答えなさい。

問四 本文から「私」が「松本先生」のことをどう思っていたことがわかるか、ふさわしいものを次のA、Eから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 関心を持たない生徒にも理科のおもしろさを伝えたいと、工夫をこらした実験を毎回行う熱心な教師としての姿にაცოგაれていた。

イ 先生の説明はむずかかったが、小学生である「私」に対しても豊富な知識をもとに正確に教えてくれるので、しただっていた。

ウ 多くの知識と人生経験により、生意気で周囲になじめない「私」を正しく導いてくれる先生に、父のような温かみを感じていた。

エ 先生が、ほかの先生や子供たちとは異なることに興味をもつという点に、自分と似たところを感じ、親近感をいだいていた。

オ もの静かで淡々と授業を進める態度を近寄りがたく思いつつも、何となくさびしげな様子の先生に心ひかれていた。

問五 線部③「聞き」た知識が「少し聞いてなんとなく知っている知識」という意味になるように、空らんにはまる語を、ふさわしく活用させて答えなさい。

問六 線部④「松本先生の態度は、例になく、厳しかった」のはなぜか、説明しなさい。

問七 線部⑤「私を救うための誘導」とは具体的にはどのようなことを指すのか、説明しなさい。

問八 線部⑥「はい、そうです」と答えた理由としてふさわしくないものを、次のA、Eから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 自分を救おうとする先生の気持ちを理解する力がないと思われるのがいやだったから。

イ 先生の気持ちをわかった上で、それに逆らったと思われるのがいやだったから。

ウ 自分の気持ちを仲間知られるのがこわかったから。

エ 罰を受けるのがこわかったから。

問九 線部⑦「裏切り」とはどのようなことを言っているのか、説明しなさい。

一一・三三 の問いはこの裏にあります。

問一 線部①「草木のしげるにまかせた」とはどのような様子なのか、答えなさい。

問二 線部②「のぞむ」の「こ」での意味を答えなさい。

問三 1 3 に最もふさわしい語を次のア～エから一つずつ選び、記号で答えなさい。ただし、同じ記号は一度しか使えません。

- ア ても
- イ ままに
- ウ もの
- エ ゆえに

問四 線部③「むぞうさ」を漢字に直して答えなさい。

問五 線部④「わすれまい」を、「わすれ」に続く形で、意味を変えずに言い換えなさい。

問六 線部⑤「これだからかなわん」とは、どういうことを言っているのか、最もふさわしいものを次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 元気でいようと思ってもいられない。
- イ 体がうまく動かなくて大変だ。
- ウ すぐにすじをちがえるのがつらい。
- エ 若者の手を借りないと何もできない。

問七 線部⑥「まばゆい白光に目を射られて立ちすくんだ」とありますが、「少年」の「目を射た」のはどのようなものか、説明しなさい。

問八 【a】【～】【d】に最もふさわしい動詞を、次のうちからそれぞれ選び、本文にあてはまる形に直して答えなさい。ただし、同じ動詞は一度しか使えません。

- かえる しぼる そそぐ む
- もてる

問九 線部⑦「やかましや」とありますが、「○○や」が、この言葉と同じ用いられ方をしているものを次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 古池やかわずとびこむ水の音
- イ はな子や、こちらへおいで。
- ウ お母はそばやに行こうよ。
- エ もう、てれやなんだから。

問十 線部⑧「ふしぎな話だが、あれを見つけたとたん、もう、新聞配達をやめるの、やめないのなんてことは、どうでもよくなった」とありますが、「ふしぎな話だが」か「だ」と言っているのか、説明しなさい。

問十一 線部⑨「それで、けさは、きみにここまで来てもらったのさ」とありますが、「老人」が「こ」に「来てもら」おうと決意したことがわかる一文を探し、はじめの五字をぬき出しなさい。ただし、句読点も一字と数えます。

問十二 この「老人」にとって「山」の景色はどのような意味を持つものだったのかを説明したうえで、あなたにとって同様の意味を持つものを一つ挙げ、それについて書きなさい。

二 次の各問いに答えなさい。

問一 次の文中の□□□□にふさわしい熟語を、後のカタカナから選び、漢字に直して答えなさい。ただし、同じ熟語は一度しか使えません。

- (1) 田畑を□□□□する。
- (2) 問題についてみなで□□□□する。
- (3) 外国から□□□□を輸入する。
- (4) 当代一といっても□□□□ではない。
- (5) □□□□的に活動する。
- (6) □□□□的な犯罪の手口。
- (7) 友だちにはげまされて□□□□する。

- セイリヨク カゴン コウサク メンミツ
- テンケイ キョウギ フンキ コウセキ

問二 次の漢字を組み合わせ、二字熟語を二つつくり、それぞれ読みをひらがなで答えなさい。ただし、同じ字は一度しか使えません。

強 形 映 素 平 根 列